

キモン最後の遠征及その影響

鈴 木 雅 也

キモンの最後の遠征はアテナイ及同盟国がエジプトに於てベルシャ軍のため大敗北を蒙つてから約五年の後である。その追放期間を除いて、同盟艦隊を卒いエーゲ海の各地に転戦して来たキモンは今や再度二〇〇艘の艦隊の將としてキュプロス島に赴いた。彼は此地に於て戦没したのである。此の遠征は彼の追放解除後最初のものであつた。本稿は彼の死がアテナイ政界に及ぼした影響と云うより、彼が試みた最後の遠征がいかなる形をとつて今後のアテナイに影響をもたらしたかを究める事を目的としている。^①

註

(1) 保守主義者であり又反ベルシャ的立場を終始持ちつづけたキモンの死が直ちにアテナイ政界に影響を及ぼす事は当然考へ得る、しかし後述するであらう如く、四四九年アテナイとベルシャとの間にむすばれた平和条約（「カリアスの平和」）の締結に対して此のキュプロス遠征及その成果がどの様な影響を与えたかが問題とされる。従つて彼の死ではなく遠征に重点が置かれる。

四五五―四年アテナイのエジプト遠征は失敗に歸した。派遣艦隊も増援艦隊もベルシャ軍の好餌となりその敗北はツキシデスの伝える程の大規模なものでなかつたにしても、破局は決定的であつた。^②アテナイを盟主とした第一回アテナイ海上同盟はその本部及金庫をエーゲ海のデロス島に置いていたが、これ等は直ちにアテナイに移された。更に

アテナイはスパルタとの間に和平条約を結んだ。エーゲ海の制海権を失つたアテナイとして、当然採る可き対外政策の変更である。アテナイはペルシャ海軍の進攻に備え戦線を短縮し、且つ腹背に攻撃を受ける不利を避けスパルタと和したのであつた。かくて鋭意国力の回復を図つた。

キュプロスへの遠征は従つて国力が一応回復した後、東方より加わるペルシャの圧力を排除する事にあつたと考え得る。事実プルタルコス⁽³⁾の伝える所によれば此の遠征はペルシャ王の全覇権をくつがえす事を目的としている。重大な使命を帯びたキモンは二〇〇艘の艦隊を率いて征途に上り、一部をエジプト方面に分遣し、自らは主力を指揮しつつキュプロスに向つた。

ツキジデスに従えば遠征軍はキュプロス島の南東岸のキティオンを攻撃中、指揮官キモンを失い更に飢饉のため苦しめられ同地を撤退し、キュプロスのサラミス沖に於てキティオン人キュプロス人フェニキア人と戦を交え海陸に於て勝利を獲た後帰国している。⁽³⁾更にプルタルコスによれば遠征軍はキモンの死が敵軍や又同盟軍にも知れる事を怖れ、かたく之を秘して、無事に本国に引きあげる事が出来たと報じている。⁽⁴⁾従つてツキジデス、プルタルコス共にその伝える所によればキモン最後の遠征はその目的を達する事なく終つたと解され得る。更にツキジデスは此の遠征の結末に次いで筆を本国に転じスパルタ人の神聖戦争についてのべ、⁽⁵⁾続いて一一三に於てボエオチアの戦について伝えて居り、キモンの遠征の影響の片鱗さえもうかがい知る事が出来ない。従つてペルシャ戦争時のテミストクレスに劣らぬ名将とうたわれベルシャ軍を屢々痛撃したキモンも、その最後のそして追放解除後最初の遠征に於て空しく陣没したと解され得るのである。

しかしながらディオドロスは此の遠征の直後の事件としてアテナイとペルシャとの間に結ばれた平和条約——史上所謂「カリアスの平和」——を伝えて居る。⁽⁶⁾戦争の直後に交戦国の間に結ばれた平和条約には当然戦争即、キモンの遠征の何等かの影響が見られるはずである。それ故遠征とディオドロスによる平和条約との関係が先ず検討されねば

ならぬであらう。

- (1) Thuc. I, 109, 110. ツキシデスの伝える所によればアテナイの二〇〇艘の艦隊及五〇艘の増援艦隊はともに全滅的敗北を蒙つたとされている。しかしながら当時ペルシャにあつたギリシャ人の医者クテシアスの伝える所によればアテナイの損害数はツキシデス説よりもかなり下まわるものである。(Ktesias, Persica, 32, 34, 35, 36, 37). 筆者はクテシアス説をより正確なものと見る。

cf Westlake, H. D., Thucydides and the Athenian Disaster in Egypt, Classical Philology, Vol. XLV, 1950, 112. 拙稿

「アテナイのエジプトに於ける敗戦の結果について」神戸女学院大学論集第二号、昭和二十九年

- (2) Plutarchos, Kimon, 18.

- (3) Thuc. I, 112.

キティオン (Kition) はフェニキア人の植民地中重要なものの一つである、後年ストア派の哲人ゼノン は此地の出身である。

- (4) Plut. Kim. 19. キモンの死の原因は病死もしくは戦傷死であるが何れかは不明である、なおブルタルコスに従えばキモンの

死を秘したのは彼の命によるもので、死後三十日の間キモンが依然指揮官であると敵味方双方に信じられていた。

- (5) Thuc. I, 112.

- (6) Diodoros. XII, 48. ツキシデスは、此のカリアスの平和について一言もふれていない。

二

ペルシャ軍によりエジプトに於て破局的敗北を喫し、更に之につぐキュプロス遠征も亦キモンの死によりその目的を達し得なかつたとするならば、遠征の直後に結ばれたアテナイとペルシャの平和条約は、アテナイにとつて極めて不利なるものと考えざるを得ない。しかるにデイオドロスの伝える平和条約の内容は此の様な推測を裏切る。デイオドロスの伝える此の条約はアテナイとペルシャ間の一種の不可侵条約であつて大凡四つの骨子より成り立ってい

る。

一、アジアに於けるギリシャ都市の自立

二、ペルシヤ人は（エーゲ海）沿岸から、（徒歩で）三日の距離以内に侵入しないこと

三、ペルシヤ艦隊はプハセリス及ボスポロスの *Cyanean Rock* の外に留め置くこと

四、アテナイ人は（ペルシヤ）王の領土に攻撃を加えないこと。

以上の条約内容を通じて直ちに気付かれる事は、アテナイはアジアに於ける勢力を依然として堅持し、又エーゲ海の制海権は完全にアテナイの手中にあると云う事である。ペルシヤ艦隊の活動の余地は殆どなくプハセリス以東の東地中海の東南隅、即フェニキア、シリアの沿岸に僅に行動し得るのみとなる。此処にキモンの遠征の失敗を証する何等の証拠をも認める事は出来ない。

キモンの遠征及之につづくカリアスの平和に関してはツキシデス説及ディオドロス説の二つに分れる。ウオーカー (E. M. Walker) はカリアスの平和の存在を否定しているが、その否定の原因のうち重要なものの一つは、エジプトに於て戦勝を博し、更にキモンの遠征軍をして何等なす所なく撤退せしめたペルシヤが此の様な不利な条約をアテナイと締結する理由がないと云う点にある。ウオーカーは此の様な立場を持するに當つて次の如くのべている。「此の問題（カリアスの平和の有無——筆者註）に対する解答は新史料の発見によるのではなくして、（従来の史料に對する——筆者註）判断の適用による」と。⁽²⁾かくて彼は古典の伝える所に専ら依拠しつつ平和条約を否定している。

ウオーカーは出土史料である碑文には一言も言及していない。一八九七年アテナイ、アクロポリスに於て発見された大理石に刻まれた碑文は *Athena Nike* の神殿の建設及神殿に仕える尼僧に関する法令を刻記している。⁽³⁾ トッド (M. N. Tod) によれば此の碑文は四四八年頃のものであるとされている。さらにウェイドジェリ (H. T. Wade-Gery) 、ゴム (A. W. Gomme) は、此の神殿の建設はアテナイ人の栄光のために企てられたものとしている。⁽⁴⁾ アテ

ナイ人の栄光とは何を意味するのであろうか。四四八年の直前に我々はアテナイに栄光をもたらせた事件をたずねるならば、ディオドーロスの伝えるキモンの遠征及カリアスの平和以外に之を求める事は出来ない。それ故、平和は後年のアンタルキダスの恥ず可き平和と異なり、名譽ある対等の立場に立つて結ばれたものであり、キモンの遠征軍は彼の陣没にもかかわらず、健闘よくペルシヤ軍を圧し此の栄光の基礎となつたと見られるのである。

(1) Walker, E. M., *The Peace of Callias, The Cambridge Ancient History Vol. V*, p. 469-471. ウォーカーはディオドーロスの説を否定し条約の四条件に反駁を加えている。

(2) Walker, E. M., *Ibid.*, p. 469.

ウォーカーは、グロート (Grote) がかつて此の問題を論じて以来実証の上では僅かのものしかつけ加えられていないとのべている、グロートの有名なギリシヤ史は古典的作品とされているがウォーカーの参照したのは一八八四年版であり、従つてウォーカーは前世紀以来の考古学上の発見をほとんど無視している。

(3) Tod, M. N., *A Selection of Greek Historical Inscriptions, Vol. I*, 1951, Oxford, No. 40.

(4) Gomme, A. W., *A Historical Commentary on Thucydides, vol. I*, 1950, Oxford, p. 331, and N. 1, 2.

三

エジプトに於ける敗戦の直後、同盟の本部及金庫がデロス島よりアテナイに移された事はすでにのべた如くである。以後同盟加入国が本部に支払つていた貢税 (Phoros) はアテナイに於て集められた。加入諸国名とその支払金額は各年大理石に刻記された。今日アテナイ貢税表 (Athenian Tribute Lists) と称せられるものである。従つて貢税表により我々はアテナイを盟主とする同盟の勢力範圍の年々の変化を知り得る⁽¹⁾。アテナイに於て最初に徴集された貢税は四五四—三年即エジプトに於ける敗戦の直後である。キモンがキュプロス近海に行動した時期は大凡四五〇年前

後と推定される。従つて四五一—五〇年度及四五〇—四九年度の貢税表は此の遠征の期間にあたる。(便宜上前者をリスト四、後者をリスト五と呼ぶ—第一回の貢税徴集よりそれぞれ四年目、五年目に相当する。)今リスト四をその前年度のリストと比較する時、特に際立つ相異は、キモンの行動範圍と推定される地区即キュプロスの対岸アジアのカリア地方の諸都市の名が多数リスト四に、突然現われている事である。ネッセルハウフ (H. Nesselhauf) は此の事実をキモンの軍事行動によるものとし、キモンの遠征がキュプロス方面に於てアテナイの勢力を浸透せしむる事に成功したと断定している。⁽²⁾

リスト五に於てとくに著るしい特色はカルバトス島のアルケセイア、カルケ及ペディエスの三国が新にその名を留めている事である。⁽³⁾これ等が此の年に同盟に加入した事を亦キモン遠征の影響と見なされる事は明らかである。又これ等の地方は同盟の勢力範圍の最南端を示すもので、キモンの遠征は同盟を、従つてアテナイの勢力を、従来はペルシャの支配下にあつたエーゲ海の東南部に著るしく拡大する事に成功したと見る可きである。⁽⁴⁾

ウオーカーはアテナイ貢税表の史料的价值を全く無視して居る。貢税表は明らかにカリアスの平和の直前にアテナイはペルシャと堂々と対等の平和を結ぶ可き諸条件を備えている事を示している。

(1) アテナイ貢税表の復原はすでに

Inscriptiones Graecae, vol. I, 1924 Berlin. (I. G. I², *Supplementum Epigraphicum Graecum*. Leyden, from 1923 (S. E. G.)

等によつて試みられて来たが之等に対する嚴密な再検討と修正はメリット及その協力者達によつて最近完成された。

Meritt, B. D., *Documents on Athenian Tribute*, Harvard University Press, 1937.

Meritt, B. D., Wade-gery, H. T., McGregor, M. F., *The Athenian Tribute Lists* Vol. I, 1939, Vol. II, 1949, Vol. III, 1950, Harvard University Press. (A.T.L.)

本稿に於けるテキストは A. T. L. を使用した。

(2) Nesselhauf, H., *Untersuchungen zur Delisch-Attischen Symmachie*. Klio Beihfte, XXX, 1933, p. 25.

ネッセルハウフによればリスト四に記されたと推定されるカリア地方の都市は三〇に達する。(断定し得ないのはリストの碑文が破損しているためである)

(3) A.T.L. List V.

(4) Nesselhauf, H., *op. cit.* pp 25-26.

四

カリアスが結んだと伝えられる平和条約に関しては、その内容、年代その他になお説明を要する点が若干存する。⁽¹⁾しかしながら古典の伝える所によれば、なぞに包まれているキモンの最後の遠征は、アテナイに軍事的成功をもたらした事は明らかであり、又その成功はアテナイをしてペルシャと対等の光榮ある平和を結ばしめた事は貢税表その他の碑文が示す如くである。此の点に関してはウオーカーの提出したカリアスの平和に関する疑問の一つは氷解するであらう。四七九年同盟結成以来、常に陣頭にあつてペルシャ軍を痛撃しつづけたキモンはその最後の遠征に於ても宿敵をエーゲ海より一掃し故国に榮光をもたらし、同時に彼自らも武將にふさわしい最後を飾つたと云う可きであらう。

(1) カリアスの平和に関しては条約の存在そのものを疑問視する説も存する。之はディオドロス及イソクラデス等によつて伝えられる条約の内容と当時のアテナイの國際的立場の間のギャップに基礎を置く、しかしすでにのべた所によりアテナイが対等の立場をとり得た事は明らかである。

此の他、条約を記した碑文の字体に関してテオポンボスが伝えている事実にもとづく疑問、条約内容に関してディオドロス

とイソクラテスの伝える所が食い違っている事（とくに両国の勢力範囲の境界線に関し）にもとづくもの、又締結の年代に関するもの等が存する、しかしながら筆者は主として貢税表の史料的价值を認め、平和は四四九年、両国対等の立場に於て締結されたと云う立場をとる。

参照、拙稿「カリアスの平和とアテナイ貢税表」西洋古典学研究（岩波）一九五五

Suzuki, Tsuneya

Kimón's Last Expedition

and Its Influences on Athenian History

Kimón, a general of Athens, died about 450/49 B.C., when he was a commander of the expeditionary fleet to Cyprus against Persia. In Thucydides, we can find few lines about the expedition to Cyprus, but Thucydides does not refer to the effects of it.

On the contrary, Diodoros reports that the expedition succeeded and Athens concluded the glorious peace treaty which is called peace of Callias, with Persia.

I try to make clear what was the effects of the expedition, using the epigraphical sources at that time.